

体罰がなくなる理由に関する一考察

～部活動場面に着目して～

スポーツ科学課程

98-237 辻 研一郎

I. 研究の動機及び目的

実際に教師からの体罰を受けた経験のある筆者は、体罰を加えた教師の気持ちは未だに分からない。将来、保健体育教師を目指す筆者は、実際に子どもを叱る場面があったとしても、子どもたちのことを思うなら絶対に手を挙げることはできないと認識している。そういった意味でも、一体あのとき筆者に手を上げた教師は、どういう気持ちで、どういう考えで手を挙げるまでに至ったのだろうか。また、筆者以外に体罰を受けた経験のある者には、体罰に対してどういう意識が存在しているのか。そういった点から本研究の必要性を感じた。

先行研究では、体罰の実態として、場面では「部活動」、専門教科別では「保健体育」の教師による体罰が多いと指摘されている。よって本研究では、まず、体罰を受けた側として、中等教育段階においてスポーツ系の部活動を熱心に行い、保健体育の教師になる可能性の高い学生に焦点を当て、過去の小・中・高等学校時の体罰の実態（被体罰経験率、体罰を受けた時期、体罰者、体罰場面）、体罰意識（体罰を肯定的に捉えているか否か、またそう捉える理由）を明らかにする。また、体罰を加えた側として、部活動を受け持つ保健体育教師に、現在までの体罰経歴、体罰に対する意識、体罰の実態をどう捉えているのか、なぜ体罰を行うのかについて明らかにする。そして、それぞれの調査結果をもとに、体罰を受けた側・加えた側、両者の意識の中に、体罰がなくなるこういった理由が存在するのかについて明らかにする。

II. 研究方法

① 調査方法

アンケート調査及びインタビュー調査

② 調査対象

金沢大学体育科学学生（アンケート調査）及びK高等学校で部活動を受け持つ保健体育教師のA氏（インタビュー調査）

③ 調査内容

1. アンケート調査

質問紙については、「属性（性別、学年、コース）」、「体罰経験の有無」、「体罰を受けた時期」、「誰から体罰を受けたか」、「体罰を受けた場面」、「体罰を受けた理由」、「体罰を受けたときの感想」、「体罰を必要と思うか否か」、「体罰を必要と思う、または思わない理由」を明らかにする内容とした。そのうち、「体罰を受けた理由」、「体罰を受けたときの感想」、「体罰を必要と思う、または思わない理由」については自由記述とした。

2. インタビュー調査

インタビューについては、「これまでの体罰経歴」、「体罰に対する意識」、「なぜ体罰を行ったのか」、「アンケート結果に基づいた体罰の実態をどう捉えるのか」の4つの質問を中心に行った。

④ アンケート回収率

89.7% (175 名中 157 名)

⑤ 調査期間

2001 年 11 月上旬～2001 年 12 月中旬

Ⅲ. 結果及び考察

①アンケート調査の結果

1. 体罰経験

- ・学生の約半数が直接体罰を受けており、その現場を目撃したものをあわせると、体罰の実態として7割以上の学生の目で体罰が行われている。

2. 体罰時期

- ・中学校時における体罰が最も多い。

3. 体罰者

- ・小学校時には「担任の教師」、中・高等学校時には「部活動の教師」、専門教科別では「保健体育の教師」に多い。

4. 体罰場面

- ・小学校時には「授業中」、中・高等学校時には「部活動中」が最も多い。

5. 体罰理由

- ・部活動場面での理由は、「失敗・ミスを犯した」、「態度が悪かった」が多かった。

6. 体罰意識

- ・学生の約70%が体罰を肯定している。
- ・被体罰経験の有る者ほど体罰を肯定的に捉え、被体罰経験の無い者ほど体罰を否定的に捉えるという傾向にある。
- ・体罰を受けた時点では、その教師の行為に対して納得しているものより、不満に思っているものが多い。
- ・体罰を受けた時点から現在に至るまでに、何らかの要因が関係してその意識の変容をもたらしている可能性が高い。
- ・小学校時には「担任の教師」、中・高等学校時には「部活動の教師」、つまり、接する時間の長い教師と生徒の間に、体罰を受けてもそれを肯定的に捉えるようになる何かが生まれていることが考えられる。
- ・部活動の教師による体罰から、「愛」を感じていることが考えられる。
- ・体罰に関する知識に乏しく、体罰を安易に考えているものが多い可能性が高い。

②インタビュー調査の結果

1. 学生の約7割が体罰を肯定していることについて

- ・保健体育教師を目指す学生たちの体罰肯定率の高さには、同じ保健体育教師として危険性を感じている。

2. これまでの体罰経歴

- ・A氏は、2, 3年ほど前まで体罰を行っていた。

- ・ A氏自身は、部活動場面での体罰がほとんどであった。

3. 体罰を行った理由

- ・ 特に体罰が必要であると感じていたわけではなく、若かったため経験が浅く、体罰以外の方法が見つからなかった。しかし、現在は、体罰に変わる（それ以上の）教育方法を見出したため、体罰は必要ないと考えている。また、体罰を行ったことに対して後悔している。
- ・ 体罰を行っていた当時は、人間関係・信頼関係のつながりが深い場合は、単なる暴力ではなく、あくまで教育的な意図を持つものであれば、手を上げる場面があってもいいと考えていた。

学生の体罰肯定率が70%にも上り、学生の体罰を肯定する理由から、「口で言っても分からない場合はしょうがない」という意見が頻出しており、この意見から、体罰に関する知識に乏しく、体罰を安易に考えすぎているということが推察された。一方で、体罰を否定する理由から、少数ではあるが「体罰は教師の指導力不足を表すものであるから」という意見が見られた。

一方、A氏が体罰を行った理由として、「経験も浅く、若かったため、他の方法が見つからなかった。」と述べている。また、体罰を行ったことに対して、後悔もしている。そして、学生の体罰肯定率の高さに危険性を感じている。

つまり、これらの結果から、体罰がなくなる理由の一つとして、体罰の無い教育を目指した、「教師教育」が教師を目指す学生たちに十分になされていないということが言える。体罰教師の再生産に歯止めをかけるためには、この「教師教育」が必要不可欠なのではないかと考えられる。

また、体罰場面として特に多かった、部活動場面で体罰を受けた経験のある学生は、教師から愛を感じているということが分かった。つまり、接する時間の長い教師からの愛が体罰意識を肯定へと変化させているのである。A氏自身も、手を上げるときには、人間関係・信頼関係が必要であり、そのためには、お互いの人間性を認め合うことと、時間の経過が必要であり、逆にそういった関係が薄弱な者に対しては、手を上げることはできないと述べている。また、A氏は、スポーツの場面は、座学に比べて生徒の取り組む姿勢、態度が視覚的に捉えやすいと述べている。実際に、アンケートの「体罰を受けた理由」では、「失敗・ミスを犯した」、「態度が悪かった」が部活動場面に多かったことからそのことが言えるだろう。

これらの結果から分かることは、子どもと教師の関係（人間関係・信頼関係）が、双方の体罰に対する意識に影響を及ぼしているということである。つまり、そういった関係が密になればなるほど、教師は、教師として本来ならば超えてはならない一線（教育的懲戒と体罰）を超えてしまい、一方、受け手である子どもは、受け入れてはならないものまで受け入れてしまうのである。そう考えると、一方的な受け手である子ども自身には全く罪はなく、超えてはならない一線を超えてしまった教師に問題があるということが考えられる。この点に関して武田¹⁾は、罰の使用について、「どうしても罰を与えなくてはならないと思うときには、まず他者の判断なり意見を尋ねるだけの余裕が欲しいものである。たいていの社会問題は、コーチがかつとまって罰を与えたときに起こっている。もしその場で、他のコーチや顧問の先生の意見を求めることが難しいならば、前もって冷静なときに、罰についてのルールを、チームの中で、選手たちと話し合って作っておくことが賢明な方法であるかもしれない。」と述べている。つまり、どのような状況にあっても、本当にそうすることが正しいのかどうかを考えるだけの余裕が必要なのである。また、スポーツという場面が視覚的

に取り組む姿勢、態度が見えやすい分、注意する場面が多くなってくるだけに、そのことは非常に重要であると考えられる。実際にA氏は、感情的に体罰を行ったことはないものの、体罰を行うことによって、その後の生徒との関係がまずくなることなどは、考えていなかった。また、そうならなかったことが幸いなのかもしれないとも述べている。

つまり、部活動場面における体罰がなくなる理由として、子どもと教師が相互に人間性を認め合う中で、時間の経過と共に、人間関係・信頼関係という面におけるつながりが深くなっていく。そういった中で、子どもは、教師の全てを受け入れてしまい、一方教師は、何をしても許されると感じてしまうということが考えられる。

牧²⁾は、「判断主体が、絶えず教育上の力量を磨き、自己抑制につとめるのでなければ、懲戒権行使に歯止めがなくなってしまう」と述べている。つまりはこの言葉に尽きるのかもしれない。

IV. 結論

本研究では、被体罰者である学生と体罰者である教師に調査を行い、体罰の実態と意識を明らかにし、体罰がなくなる理由の一部分を明らかにすることを課題とした。本研究の範囲内で、次のような結論を得ることができるのではないかと考えられる。

① 学生たちが体罰を肯定する理由として、「口で言っても分からない場合は、体罰を行ってもしようがない」という意見が頻出していることから、体罰に関する知識に乏しいこと、体罰を安易に考えていることが考えられた。また、A氏が体罰を行った理由として、「経験も浅く、若かったため、他の方法が見つからなかった。」と述べており、そして、体罰を行っていたことに対して後悔しているという事実が明らかになった。

以上のことから、学校教育において体罰がなくなる理由の一つとして、体罰の無い教育を目指した、「教師教育」が教師を目指す学生たちに十分になされていないということが考えられる。体罰教師の再生産に歯止めをかけるためには、この「教師教育」が不可欠なのではないかと考えられる。

② アンケートの結果で、体罰場面として特に多かった、部活動場面で体罰を受けた経験のある学生は、教師から「愛」を感じているのではないかとということが考察された。つまり、接する時間の長い教師からの「愛」が体罰意識を肯定へと変化させているのではないかとということが考えられるのである。事実、A氏自身も、手を上げるときには、人間関係・信頼関係が必要であり、そのためには、お互いの人間性を認め合うことと、時間の経過が必要であり、逆にそういった関係が薄弱な者に対しては、手を上げることはできないと述べている。

これらの結果から、子どもと教師の関係（人間関係・信頼関係）が、双方の体罰に対する意識に影響を及ぼしているのではないかとということが考察された。つまり、そういった関係が密になればなるほど、教師は、教師として本来ならば超えてはならない一線（教育的懲戒と体罰）を超えてしまう可能性が高くなるということが考えられるのである。

V. 参考・引用文献

1) 武田建：「コーチング」、誠信書房、1985年、pp33-51

2) 牧証名（1984年）：「体罰をめぐる学校の内と外」、季刊教育法（エイデル研究所）、第50号、p96